

入試成績の追跡研究 (6)

小 高 晋 二

1. はじめに

近年ますます大学の入試方法は多様化してきており、ただ単に総点主義の学力試験一辺倒からの脱却を試みる方向が進んでいるように思われる。これは、偏差値だけで輪切りにされた、必ずしもその大学での勉学意欲のない、平均化された入学者よりも、個性に富んだ、何か一芸に秀いでた意欲のある受験生を入学させたいという大学側の考えによるものと思われる。このことは本来的には意義のあるものと思われるが、しかし、現実には、受験の頂点に立つような、いわゆる超一流の大学においては、その種の改善が行なわれず、また行なわれたとしても、定員のほんの一部だけに採用されるという状態であるので、まだまだ入試多様化の方向が十分に行き渡っているとは言い難い。

さて、本稿は、大学入学者選抜試験における学力試験の成績（以下、入試成績と記す）と、大学在学中の学業成績（以下、学業成績と記す）との関連、および、高校在学中の成績（調査書記載の教科別評定平均値の平均、以下、調査書成績と記す）と、学業成績との関連、また、大学において特に秀れた学業成績を修めた者と、逆に、特に学業成績の悪かった者が、入試成績と調査書成績においてはどのような状態にあったかなどを調査し、より適切な大学入学者選抜のあり方を検討するためのひとつの資料を得ることを目的として、従前より本学学生を対象として調査してきたものの一部をまとめたものである。

なお、この調査は、東京都区部にある一私立短期大学で、入学試験科目としては2教科（後に詳説）を課しているケースであることをあらかじめお拒りしておきたい。

2. 対 象

今回発表の調査対象となった学生達は、昭和59年4月および昭和60年4月に入学し、昭和61年3月および昭和62年3月まで在学し、連続して2ヶ年間の学業成績を残した者全員である。但し、入学者選抜試験を受験していない校内推薦入学者は比較の資料を欠くので、また、入学はしたが途中で除籍になったり、休学や退学をした者、それに加えて、勉学の意欲に乏しく、著しく単位未修得の者などについては、2ヶ年間の十分な学業成績を残していないので、これを調査対

象から除外してある。⁽¹⁾従って、今回の調査対象となった学生達は、結局、昭和59年度入学者で406名、昭和60年度入学者では438名であった。これら対象となった学生達を、便宜上、その出身高校別にいくつかのグループ（群）に分類し、開設学科（専攻を含む。以下、学科とのみ記す）別にその人数を示すと、表1、表2のようになる。

もちろん、調査書成績に関する詳細かつ厳密なデータを得たいのであれば、各高校別に調査すべきなのであるが、1校からデータを得るに足る多数の入学者を出している高校がそう多くはないので、およその傾向を見るという程度のことでB—G群に分類したわけである。この6群の分類は、以下の如く、当該高校の設置されている住所と設置主体とを基準にして行った。すなわち、

B群 東京都内、国・公立高等学校

C群 東京都内、私立高等学校

D群 首都圏3県（千葉県、埼玉県、神奈川県。以下同様）内、国・公立高等学校

E群 首都圏3県内、私立高等学校

F群 首都圏3県外、国・公立高等学校

G群 首都圏3県外、私立高等学校

である。

表1 昭和59年度入学、各科・高校群別調査対象人数

高校群 科	B	C	D	E	F	G	計
W	10	9	17	3	2	0	41
X	28	25	56	5	23	5	142
Y	35	19	68	6	19	6	153
Z	23	13	21	4	8	1	70
計	96	66	162	18	52	12	406

表2 昭和60年度入学、各科・高校群別調査対象人数

高校群 科	B	C	D	E	F	G	計
W	7	16	25	1	10	2	61
X	34	27	65	14	23	1	164
Y	29	19	64	8	15	0	135
Z	9	20	30	5	14	0	78
計	79	82	184	28	62	3	438

3. 資料と方法

(1) 資 料

資料として用いたものは、本学に保管されている入試判定に関する諸資料、学生の成績に関する諸資料、高校より送付された調査書等である。

(2) 方 法

本研究においては、学業成績（本学における）を中心に、それが入試成績および調査書成績とどのように関連しているかを検討することに主眼を置いているので、これら三者が、それぞれ比較検討し易いように数値化されていることが必要かと思われる。以下、ここで入試成績、調査書成績および学業成績と称するものについての説明と、その数値化について述べておきたい。

まず、ここで入試成績と称するものは、入試で課せられる学科試験（国語〔100点〕および英語〔100点〕、それに、科によっては作文〔20点〕も加えられる）の合計点に、調査書得点（評定平均値の平均を2倍して4捨5入した数値）を加えた総合点のことであり、最高点は210点（作文が課せられる場合には230点）である。

次に、調査書成績であるが、これは、調査書記載の教科別評定平均値の平均値のことであり、既に数値化されているので特に数値化の必要はない。

最後に学業成績であるが、これは、短大在学2ヶ年間に履修したすべての科目⁽²⁾についての評価の総計のことであり、この数値化にあたっては次のような方法をとった。すなわち、まず、学生各自が履修した各科目ごとの評価をA、B、C、Dに区分し⁽³⁾、Aには3点、Bには2点、Cには1点ずつの得点を与えた（Dは0である）。次に、学生各自ごとに、評価Aの科目が何科目あったか、評価Bは何科目かというように、評価ごとの数を集計し、その数ごとに前述の各得点を乗じたものの合計を各自の総合点とし、それを履修科目数の合計で除した数値を、当該学生の学業成績の数値としたわけである⁽⁴⁾。

なお、相関係数の算出にあたって、前回発表分まででは、当該二者間の比較がし易いように、場合によっては数的処理をした後で、二者間の相関係数を算出したわけであるが、今回は、当該二者間の比較にあたって、先にそれぞれの偏差値を算出し、その偏差値に基づく偏差値間の相関係数の算出という方法にした。これは、比較にあたって数的処理をすることに伴う誤差をなくすることができるということ、および、偏差値が全体の中での特定の者の位置を知るのに秀れているということからの処置である。このような計算が容易に出来るのもパソコンのお蔭である。この新しい方法と従前の方法による相関係数の相違はそれほどはなかった⁽⁵⁾。

4. 結 果

(1) 入試成績と学業成績との関連について

表3、表4は共に、入試成績段階（高点順）ごとに、それぞれ該当者が何人ずついたか、また、それぞれの段階別に、該当者全員の学業成績を平均するとどうなるのか、さらに、その学業成績平均値は、その学科全員の学業成績平均値と比較すると、どの程度の差があるのか、ということを示したものである。▼印が付いているのは、その学科全体の平均値を下回っている場合である。従って、▼印が得点段階の低い方、すなわち、表の右半分にのみ付いていれば、入試成績と学業成績とがだいたい対応していることになるわけである。

なお、各科を通じて、入試成績の段階区分の方法について一言付け加えるとすれば、次の点で

表3 昭和59年度入学、科別・入試成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

科	入試成績段階	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	計
W	該 当 人 数	0	1	2	0	1	1	6	8	17	5	0	0	41
	学業成績平均値	—	2.46	2.33	—	2.44	2.48	2.44	2.51	2.34	2.19	—	—	2.38
	科平均値との差	—	0.08	▼0.05	—	0.06	0.10	0.06	0.13	▼0.04	▼0.19	—	—	—
X	該 当 人 数	8	3	5	8	5	10	8	14	25	22	28	6	142
	学業成績平均値	2.30	2.62	2.28	2.51	2.29	2.27	2.32	2.25	2.37	2.21	2.18	2.21	2.28
	科平均値との差	0.02	0.34	—	0.23	0.01	▼0.01	0.04	▼0.03	0.09	▼0.07	▼0.10	▼0.07	—
Y	該 当 人 数	1	2	3	5	14	12	16	26	43	30	1	0	153
	学業成績平均値	1.52	2.66	2.31	2.14	2.00	2.31	1.93	2.07	2.15	1.95	1.97	—	2.08
	科平均値との差	▼0.56	0.58	0.23	0.06	▼0.08	0.23	▼0.15	▼0.01	0.07	▼0.13	▼0.11	—	—
Z	該 当 人 数	3	1	1	4	4	1	7	9	16	16	8	0	70
	学業成績平均値	2.38	2.21	2.57	2.34	2.10	2.76	2.40	2.32	2.32	2.42	2.28	—	2.34
	科平均値との差	0.04	▼0.13	0.23	—	▼0.24	0.42	0.06	▼0.02	▼0.02	0.08	▼0.06	—	—

表4 昭和60年度入学、科別・入試成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

科	入試成績段階	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	計
W	該 当 人 数	2	2	1	4	1	4	7	11	10	18	1	0	61
	学業成績平均値	2.30	2.51	2.43	2.23	1.62	2.39	2.11	2.17	2.20	2.18	1.45	—	2.19
	科平均値との差	0.11	0.33	0.24	0.04	▼0.57	0.20	▼0.08	▼0.02	0.01	▼0.01	▼0.74	—	—
X	該 当 人 数	4	4	6	9	8	14	16	21	31	38	13	0	164
	学業成績平均値	2.55	2.41	2.32	2.25	2.14	2.09	1.94	2.04	2.16	2.10	1.96	—	2.11
	科平均値との差	0.44	0.30	0.21	0.14	0.03	▼0.02	▼0.17	▼0.07	0.05	▼0.01	▼0.15	—	—
Y	該 当 人 数	1	4	4	7	6	11	15	14	23	38	12	0	135
	学業成績平均値	1.93	2.42	1.90	1.97	2.37	2.02	2.23	2.27	2.04	2.11	2.11	—	2.13
	科平均値との差	▼0.20	0.29	▼0.23	▼0.16	0.24	▼0.11	0.10	0.14	▼0.09	▼0.02	▼0.02	—	—
Z	該 当 人 数	2	1	2	6	2	6	5	15	14	19	6	0	78
	学業成績平均値	2.79	1.20	2.22	2.15	2.30	2.21	2.40	2.27	2.21	2.40	1.94	—	2.26
	科平均値との差	0.53	▼1.06	▼0.04	▼0.11	0.04	▼0.05	0.14	0.01	▼0.05	0.14	▼0.32	—	—

ある。すなわち、入学者の入試成績というのは、飛び抜けて高得点の場合から、不合格者と1点差の場合まで、非常に点数差があるわけであるが、これを1点ごとに区分して調査しなければならない積極的な理由は見い出せない。ある一定の点数ごとに区分して12段階にグループ分けしたということである。但し、第I段階だけでは、一定の点数幅を越えている場合もある。何故ならば、12の段階に収めるためには、飛び抜けた高得点者がいても、それを第I段階に含めなければならぬからである。

また、科によって入試問題も、合格者最低点も異っていることを付記しておきたい。

さて、これらの表から読みとれる入試成績と学業成績との関連について要点のみを記すと、次のようになる。

- 1) ▼印は必ずしも表の右半分にのみ付いているわけではない。科によっては、第I段階、第II段階に付いている場合もある。従って、全体として見ると、入試成績は学業成績と必ずしも正確に対応しているとは言えそうにはない。
- 2) しかし、年度別、科別に見れば、▼印が右半分に集中している場合もあるので、この場合には、入試成績と学業成績との対応関係があったと言えそうである。

次に、これらの表の数値を基に、入試成績と学業成績との関連を、相関係数によって表わしたものが表5である。相関係数の算出にあたっては、前述したように、入試成績段階別に、入試成績平均値および学業成績平均値それぞれの偏差値を求め、その後で偏差積法によって算出した。なお、この算出にあたっては、1段階に該当者が4名以上いる場合に限定し、かつ、1段階1人格として計算した。何故ならば、1段階わずか1名の該当者というような場合のために、全体の数値が大きく左右されることを恐れたからである。参考のために過去の数値も載せてある(但し、数値の算出法は、今回とは若干異なる)。

表5 入学年度別、科別、入試成績と学業成績との相関係数
(1段階4名以上の場合)

科 入学年度	W	X	Y	Z
60	0.362	0.860	0.119	0.116
59	0.830	0.467	0.287	-0.358

参考

科 入学年度	W	X	Y	Z
58	0.800	0.410	-0.239	0.727
57	0.276	0.761	0.114	0.966
56	—	0.905	0.904	0.103
55	—	0.869	0.482	0.444
54	—	-0.079	0.739	0.143

表5を見てすぐに気づくことは、数値のアンバランスである。すなわち、かなり高い正の相関から負の相関までである。参考に挙げた前回発表分を併せてみても、安定した数値は見られない。従って、この結果からすれば、入試の成績が短大2ヶ年間の学業成績に常に正確に対応したとは必ずしも言えないわけである。今後、これらの数値が高い正の相関を得るにはどうすればよいかを検討すべきであるということになる。

(2) 調査書成績と学業成績との関連について

表6および表7は、表3および表4を作成したのと同様の方法で、調査書成績を一定の段階ごとに区分し、各段階ごとに、それぞれ該当する人数と、該当者の全員の学業成績の平均値を示したものである。科平均値との差とは、当該科全体の学業成績平均値と各段階別の学業成績平均値

表6 昭和59年度入学，科別・調査書成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

入試成績段階		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
W	該当人数	1	3	4	9	15	6	2	1	0	0	41
	学業成績平均値	2.42	2.26	2.64	2.41	2.49	2.13	1.77	2.50	—	—	2.38
	科平均値との差	0.04	▼0.12	0.26	0.03	0.11	▼0.25	▼0.61	0.12	—	—	—
X	該当人数	0	0	4	22	45	41	21	7	2	0	142
	学業成績平均値	—	—	2.53	2.50	2.33	2.21	2.14	2.13	1.78	—	2.28
	科平均値との差	—	—	0.25	0.22	0.05	▼0.07	▼0.14	▼0.15	▼0.50	—	—
Y	該当人数	2	0	5	26	43	46	28	2	1	0	153
	学業成績平均値	2.14	—	2.28	2.23	2.21	2.01	1.84	1.58	2.07	—	2.08
	科平均値との差	0.06	—	0.20	0.15	0.13	▼0.07	▼0.24	▼0.50	▼0.01	—	—
Z	該当人数	0	1	6	12	24	17	8	1	1	0	70
	学業成績平均値	—	2.72	2.39	2.50	2.36	2.35	2.07	2.26	1.60	—	2.34
	科平均値との差	—	0.38	0.05	0.16	0.02	0.01	▼0.27	▼0.08	▼0.74	—	—

表7 昭和60年度入学，科別・調査書成績段階別該当人数および学業成績平均値一覧

入試成績段階		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計
W	該当人数	0	2	8	11	16	15	7	2	0	0	61
	学業成績平均値	—	2.59	2.43	2.23	2.17	2.08	2.13	1.68	—	—	2.19
	科平均値との差	—	0.40	0.24	0.04	▼0.02	▼0.11	▼0.06	▼0.51	—	—	—
X	該当人数	0	1	6	19	39	54	36	9	0	0	164
	学業成績平均値	—	2.56	2.30	2.33	2.27	2.07	1.93	1.79	—	—	2.11
	科平均値との差	—	0.45	0.19	0.22	0.16	▼0.04	▼0.18	▼0.32	—	—	—
Y	該当人数	0	1	6	27	40	36	22	2	1	0	135
	学業成績平均値	—	1.48	2.48	2.27	2.21	2.13	1.81	1.74	1.55	—	2.13
	科平均値との差	—	▼0.65	0.35	0.14	0.08	—	▼0.32	▼0.39	▼0.58	—	—
Z	該当人数	0	3	5	9	30	17	12	2	0	0	78
	学業成績平均値	—	2.57	2.08	2.35	2.37	2.12	2.26	1.40	—	—	2.26
	科平均値との差	—	▼0.31	0.18	0.09	0.11	▼0.14	—	▼0.86	—	—	—

との差のことであり、その際、科全体の平均値を下回っている場合には▼印が付けてある。従って、▼印が調査書成績段階の低い方、すなわち、表の右半分に集中していれば、調査書成績と学業成績とがだいたい対応しているということになるわけである。

さて、これらの表から読みとれる調査書成績と学業成績との関連の結果についてその要点を記せば、次のようになる。

- 1) ▼印は概して右半分に集中し、左半分、つまり、調査書成績の高い段階に▼印が付いているのは3ヶ所にすぎない。従って、全体として言えることは、調査書成績は学業成績に対応していたということである。
- 2) しかし、中には、60年度Y科のように、わずか1名ではあるが、調査書成績が最高で学業成績が最低という場合もある。従って、調査書成績がそのまま信用できるわけでもないということである。

次に、これらの表の数値を基に、調査書成績と学業成績との関連を、相関係数によって表わしたものが表8である。この数値は、表5の場合と同様に、1段階に該当者が4名以上いる場合で、両者の偏差値間の相関係数である。参考のために、過去の数値も添えてある（但し、数値の算出法は今回とは若干異っている）。

表8 入学年度別、科別、調査書成績と学業成績との相関係数
(1段階4名以上の場合)

科 入学年度	W	X	Y	Z
60	0.875	0.940	0.950	-0.140
59	0.877	0.970	0.940	0.780

参考

科 入学年度	W	X	Y	Z
58	0.610	0.952	0.960	0.943
57	0.624	0.913	0.931	0.862
56	—	0.860	0.954	0.944
55	—	0.866	0.957	0.942
54	—	0.747	0.857	0.923

表8の数値を見ると、60年度入学のZ科の数値を除けば、いずれも高い正の相関であることがわかる。また、参考に挙げた前回発表分の数値を併せてみても、全体として、高い正の相関であることがわかる。従って、この結果からすれば、調査書成績は短大2ヶ年間の学業成績と大体において対応していたということである。

なお、60年度入学のZ科の負の相関というのは、過去7ヶ年間で唯一のケースで、まさに例外であるので今後もう少し詳細に分析する必要があると思う。

(3) 高校群別にみた調査書成績との関連について

この項は、ある科に関して、高校群間に調査書成績と学業成績との関連に差があるかどうかを調査した結果の報告である。つまり、一言で言えば、高校群間に格差があるかどうかということについての調査ということである。本来ならば、各高校間に調査書成績の信頼性に関する差があるかどうかを調査すべきなのであるが、各高校別に調査するに足る十分な標本数が得られないので、高校群間の調査とした次第である。

さて、調査の方法は、まず高校群別に、当該者全員の調査書成績の平均値を求め、次にその科全員の調査書成績平均値および学業成績平均値との比率によって、期待される高校群別の学業成績平均値を算出し、この数値を各高校群別の学業成績平均値の実績と比較したわけである⁽⁷⁾。結果は表9にまとめてある。なお、参考のために過去の数値も添えてある。

表9 年度別、高校群別、調査書成績基準学業成績達成率（ある科の場合）

年度 \ 高校群	B	C	D	E	F	G
60	110.3	95.2	102.3	100.0	94.7	—
59	99.1	99.1	103.5	104.8	91.4	112.1

参考

年度 \ 高校群	B	C	D	E	F	G
58	102.9	102.5	100.4	109.0	91.6	—
57	104.4	97.1	99.6	84.0	98.7	91.0
56	101.8	93.7	103.6	90.8	100.9	81.7
55	103.8	99.1	100.8	92.0	91.6	87.1

さて、この表で達成率というのは、調査書成績に比しての学業成績の出来具合を表わしているわけであるから、100%を境にして、より上の数値であれば、調査書成績の割には学業成績が良かったということであり、下の数値であれば、調査書成績の割には学業成績が振わなかったということである。過去の数値も考慮に入れて、結論的に言えることは、B群およびD群が、大体において、100%を越すが、他の高校群の場合には100%を越す場合が少いということである。つまり、前項に見た通り、調査書成績は学業成績とかなりの程度において対応するわけであるが、高校群別にみると対応に差があったということなのである。従って、端的に言えば、調査書成績を、高校群を問わず（そして多分、高校を問わず）、全く同一に取り扱うことには無理がありそうだということである。

(4) 学業成績の視点から

この項は、本学での学業成績の特に良かった者（各科上位10%）と、学業成績の特に悪かった

図1-1 昭和59年度入学Z科学業成績上位者10%（7名）の位置

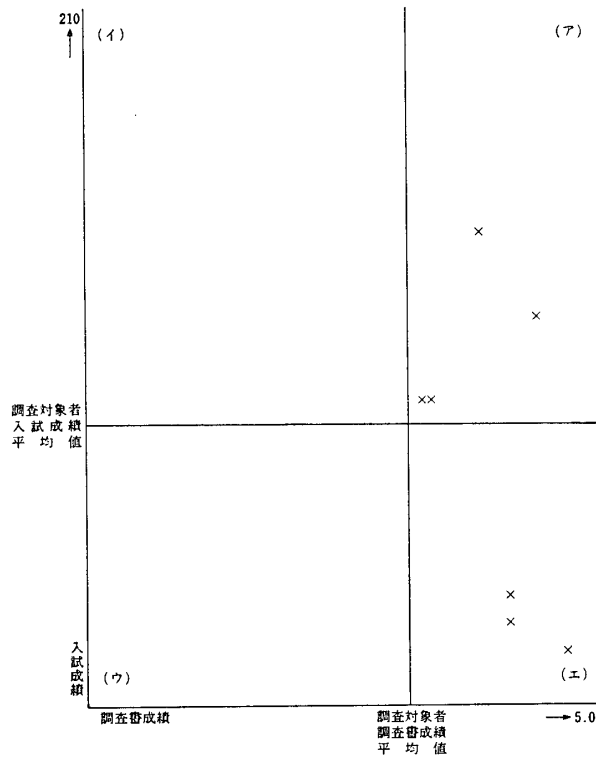


図1-2 昭和60年度入学Z科学業成績上位者10%（8名）の位置

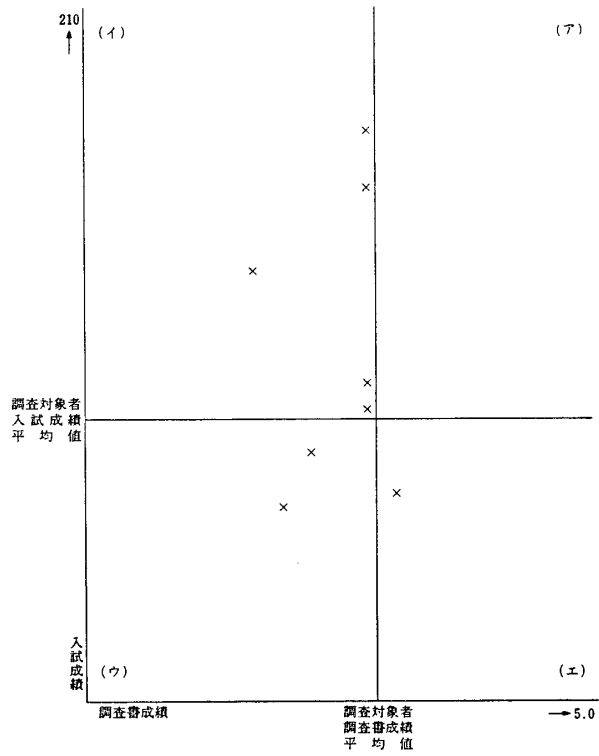


図 2-1 昭和59年度入学Z科学業成績下位者10% (7名) の位置

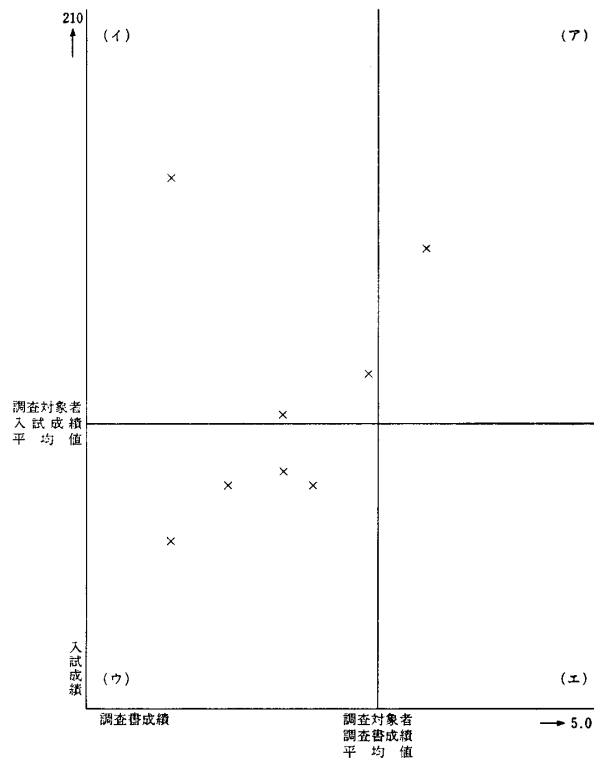
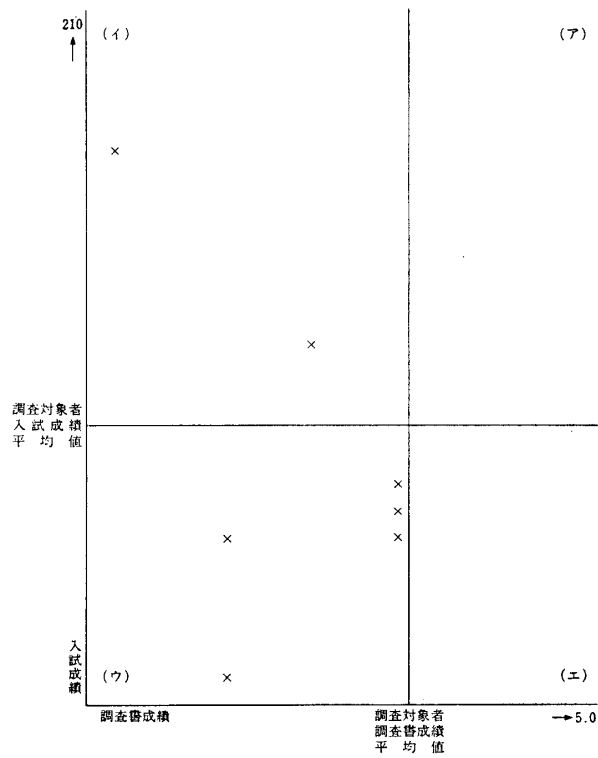


図 2-2 昭和60年度入学Z科学業成績下位者10% (8名) の位置



者（各科下位10%）について、その入試成績の状況と調査書成績の状況を、科別に調査した結果の報告である。

図1は、Z科を例にとって、学業成績上位者が、入試成績の平均値と調査成績の平均値との関係において、どのような位置を占めていたかを個人個人×印で図示したものである。図においては、縦軸が入試得点を示し、横軸が評定平均値の平均を示している。つまり、上方ほど入試成績が良く、また、右方ほど調査書成績が良いということである。図2も、同じく、Z科を例にとってあるが、この場合は学業成績下位者の場合である。

さて、図1-1を見ると、×印の位置はすべて調査書成績平均値の右側、つまり、平均値より高いことがわかる。従って、学業成績上位者は、いずれも、調査書成績が良い者であったということなのである。しかし、入試成績との関係で見ると、入試成績の良かった者も、悪かった者もいたということである。ところが、図1-2を見ると、同じく、学業成績上位者であるにもかかわらず、×印の位置が、調査書成績平均値の左側に集中しているのである。つまり、調査書成績は悪いにもかかわらず、学業成績は良かったということである。また、入試成績との関係で見ると、図1-1同様に、入試成績の良かった者も、悪かった者もいたということである。但し、図1-2のような例は、各科を通じてもかなりめずらしいケースである。なお、この60年度Z科における学業成績と調査書成績の関係の特異性は、表8の数値にも現われている。

次に、図2を見てみよう。×印の位置は、図2-1においてはすべて、また、図2-2においては1ヶ所を除きすべて、調査書成績平均値の左側、つまり、評定平均値の平均の低い方に集中しているのである。従って、学業成績の悪かった者は、調査書成績も悪い者であったということなのである。また、入試成績との関連で見ると、図1と同様に、入試成績の高い者も、低い者もいたということである。

なお、図示したのはZ科だけであるので、他科も併せて各科別に、学業成績上位10%と下位10%の者について、入試成績平均値と調査書成績平均値とを基準にして、それぞれ図1に示した(ア)、(イ)、(ウ)、(エ)のいずれの領域に何名ずついたかを示したのが、表11および表12である。

表11-1 昭和59年度入学、各科学業成績上位者(10%)の場合(人数)

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
(ア)	1	6	2	4	13
(イ)	4	1	1	0	6
(ウ)	0	2	3	0	5
(エ)	0	6	9	3	18
計	5	15	15	7	42

(注) (ア) 入試成績、調査書成績共に平均値以上
(ウ) 入試成績、調査書成績共に平均値以下

表11-2 昭和60年度入学、各科学業成績上位者(10%)の場合(人数)

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
(ア)	4	9	6	0	19
(イ)	0	1	1	5	7
(ウ)	1	0	1	2	4
(エ)	2	7	6	1	16
計	7	17	14	8	46

(イ) 入試成績は平均値以上、調査書成績は平均値以下
(エ) 入試成績は平均値以下、調査書成績は平均値以上

表11-1, 表11-2を見て気をつくことは, (ア)の領域と(エ)の領域の人数が, 他の領域に比して, 多いということである。これは, つまり, 入試成績の高低にかかわらず, 学業成績の良かった者は, 概して, 調査書成績の良い者に多かったということである。次に, 表12-1, 表12-2の場合であれば, 人数の多いのは(イ)の領域と(ウ)の領域であるので, この場合は, 学業成績の悪かった者は, 概して, 入試成績の高低よりも, 調査書成績の悪い者に多かったということになるのである。なお, 表11および表12を, 入試成績平均値, 調査書成績平均値にのみ基準を合せて整理

表12-1 昭和59年度入学, 各科学業成績下位者(10%)の場合(人数)

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
(ア)	0	0	1	0	1
(イ)	2	4	3	2	11
(ウ)	2	8	8	5	23
(エ)	0	2	3	0	5
計	4	14	15	7	40

(注) (ア) 入試成績, 調査書成績共に平均値以上

(ウ) 入試成績, 調査書成績共に平均値以下

表12-2 昭和60年度入学, 各科学業成績下位者(10%)の場合(人数)

領域 \ 科	W	X	Y	Z	計
(ア)	1	2	2	1	6
(イ)	1	5	4	3	13
(ウ)	3	9	5	4	21
(エ)	1	0	3	0	4
計	6	16	14	8	44

(イ) 入試成績は平均値以上, 調査書成績は平均値以下

(エ) 入試成績は平均値以下, 調査書成績は平均値以上

表13 入試成績平均値を基準にした場合

1) 昭和59年度入学, 各科学業成績上位者(10%)の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	5	0	5
X	7	8	15
Y	3	12	15
Z	4	3	7
計	19	23	42

2) 昭和60年度入学, 各科学業成績上位者(10%)の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	4	3	7
X	10	7	17
Y	7	7	14
Z	5	3	8
計	26	20	46

3) 昭和59年度入学, 各科学業成績下位者(10%)の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	2	2	4
X	4	10	14
Y	4	11	15
Z	2	5	7
計	12	28	40

4) 昭和60年度入学, 各科学業成績下位者(10%)の場合(人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	2	4	6
X	7	9	16
Y	6	8	14
Z	4	4	8
計	19	25	44

表14 調査書成績平均値を基準にした場合

1) 昭和59年度入学, 各科学業成績上位者
(10%) の場合 (人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	1	4	5
X	12	3	15
Y	11	4	15
Z	7	0	7
計	31	11	42

2) 昭和60年度入学, 各科学業成績上位者
(10%) の場合 (人数)

科	平均値以上	平均値以下	計
W	6	1	7
X	16	1	17
Y	12	2	14
Z	1	7	8
計	35	11	46

3) 昭和59年度入学, 各科学業成績下位者
(10%の場合 (人数))

科	平均値以上	平均値以下	計
W	0	4	4
X	2	12	14
Y	4	11	15
Z	0	7	7
計	6	34	40

4) 昭和60年度入学, 各科学業成績下位者
(10%の場合 (人数))

科	平均値以上	平均値以下	計
W	2	4	6
X	2	14	16
Y	5	9	14
Z	1	7	8
計	10	34	44

し直したのが表13, 表14である。

表13を見てわかることは, 入試成績平均値を基準とした場合, 学業成績上位者は, 平均値を上回った者と, 平均値を下回った者が, 全科的に見れば, ほぼ同数であるのに対し, 学業成績下位者の場合は, 入試成績平均値を下回る場合の方が多いということである。また, 表14からすれば, 調査書成績平均値を基準とした場合, 学業成績上位者はおしなべて, 調査成績に秀れた者に多く, 逆に, 学業成績下位者は, 調査書成績に劣る者に多かったということである。もちろん, 各科別に見れば, また, 個人別に見れば, 上述のことが妥当しない場合もある。ただ一般的傾向として見れば, 調査書の成績が学業成績と関連しそうだということである。

5. ま と め

今回発表分についてまとめてみると次のようになる。

- 1) 入学試験時の成績は, 本学二ヶ年間の学業成績と必ずしも密接には関連していなかった。科, 年度によって高い相関のある場合もあったが, 逆に負の相関の場合もあった。
- 2) 調査書記載の評定平均値の平均と, 本学二ヶ年間の学業成績との関連をみると, 概して, 関連は深そうであった。
- 3) 但し, 60年度Z科に見られるように, 調査書成績を高校を問わず全面的に信頼することには

無理がありそうである。

4) 本学において学業成績の良かった者は、概して入試成績にかかわらず、調査書成績の良い者に多かった。また、学業成績の悪かった者は、入試成績、調査書成績共に悪い者に多かった。

以上のようなまとめは、大体において、前回までのまとめと同じである。つまり、本学二ヶ年間に課せられる学業という観点だけからすると、現状のような、短時間で少数科目の学力試験を中心とした入学選抜方法には改善の余地があるのではないかということである。

最後に、資料の閲覧にあたってご配慮をいただいた短大当局に謝意を表したい。

注(1) 除外した者の数は、昭和59年度入学者の場合、学内推薦 166 名を含む 186 名であり、昭和60年度入学者の場合は、学内推薦 135 名を含む 152 名であった。

(2) 但し、教職専門科目については除外してある。

(3) 評価A～Dの区分は次の通りである。すなわち、評価80点以上がA、70～79点がB、60～69点がC、59点以下がDである。

(4) 例えば、ある学生について、評価Aが13科目、評価Bが7科目、評価Cが5科目、評価Dが1科目であったとすれば、当該学生の学業成績は、 $(13 \times 3 + 7 \times 2 + 5 \times 1) \div (13 + 7 + 5 + 1) = 2.33$ となる。以下、数値はいずれも4捨5入した結果である。

(5) 例えば、前回発表分の昭和58年度入学者に関する、入試成績と学業成績との相関係数を、新しい方法で算出した数値と比較すると次のようになる。

科	W	X	Y	Z
以前の 方法	0.800	0.410	-0.239	0.727
新しい 方法	0.810	0.425	-0.245	0.712

(6) ちなみに、1点刻みで、1得点段階に該当者が何人いても1人格として扱った場合の、入試得点偏差値と学業成績偏差値との相関係数は(i)となり、また、全く個人別に入試得点偏差値と学業成績偏差値との相関係数を算出すると(ii)のようになる。

(i)

科 \ 入学年度	W	X	Y	Z
60	0.419	0.721	-0.003	0.012
59	0.257	0.326	0.271	0.090

(ii)

科 \ 入学年度	W	X	Y	Z
60	0.187	0.245	0.042	-0.016
59	0.123	0.156	0.087	0.001

(7) 例えば、当該高校群の調査書成績平均値①が3.43で、その科の調査書成績平均値②が3.63、学業成績平均値③が2.26だとすれば、その高校群の期待される学業成績平均④は①②/③、すなわち、2.14となる。これを実績値2.36との比率で見ると、達成率は110.3%となるわけである。